

とんまつり JAPAN
 日本全国とんまな祭りガイド
 みつらじゅん著 集英社 2000
 (文庫版は2004)

奈良県吉野町ではその昔、不心得者が蛙にされたが高僧の力で人間に戻った！という話を再現するお祭り、蛙飛行事が7月に行われるそうです。その他にも歌山県川辺町の笑い祭り、奈良県明日香村のおんだ祭り、愛知県豊川市のうじ虫祭り、北九州市小倉の尻振り祭り、佐渡島のつぶるさし…。日本全国とんまなまつりを集め、題して「とんまつり！」本当にこんな祭りってあるの？そう思わずにはられない、パワー全開の日本の奇祭を集め、紹介します。



埼玉のまつり
 埼玉ふるさとシリーズ3
 財団法人 国土地理協会／編集
 埼玉県民部自治文化課 1989

本書は、埼玉県内各地の伝統ある祭り60件を掲載し、全国的に有名なもの、あるいは県民にもあまり知られていないものを、春・夏・秋・冬の季節ごとに分け、「由緒・沿革」や「見どころ」を始め「場所」等記されており、ガイドブックとしても利用できます。また巻末には、県内の主な祭りを市町村ごとに開催月日順に掲載されています。

本書によって埼玉の歴史や文化への理解をより深めることができます。



祭りの考古学

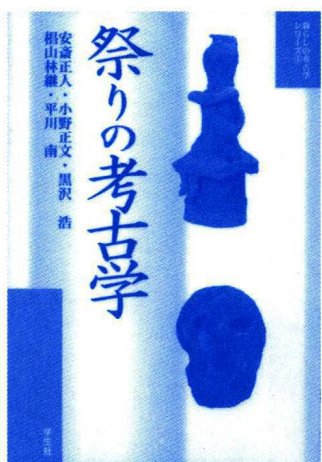
安齋正人、小野正文、黒沢浩、椋山林継、平川南著 学生社 2008

日本では、毎年一万件近くの発掘調査が行われ、多くの成果が日々蓄積されています。これらは一つとして同じものがなく、それぞれが個性的で、文献ではわからない、地域ごとの文化を雄弁に物語ってくれます。そんな古代の日本人々の暮らしはどうだったかを、旧石器時代の埋納、縄文の土偶、弥生の銅鐸など、祭祀からさぐるのがこの「祭りの考古学」です。

祭祀という言葉は、考古学でもよく使われる言葉の一つです。祭祀を考古学でアプローチする場合、は遺物(モノ)から入っていきます。とはいえ、遺跡で使われたモノが残っていても、それを使って行われた行為や演じられた内容等、一番肝心なところは、実はわからないことが多いこのこと。それほど祭りという問題を考古学的に考えていくことは難しいのですが、手を合わせる縄

文時代の土偶は、祭りの素朴な姿を示していますし、古墳時代の人物埴輪は当時の葬送儀礼をリアルに伝えています。

今後、いろいろな遺跡からさまざまな遺物が得られると思います。そうした新資料の発掘によって、改変を迫られる議論こそが考古学的にみた祭祀であり、祭りの考古学なのでしよう。



特集： お祭りの本

夏から秋にかけて、日本のいたるところで様々な祭りが行われています。その規模や形はいろいろです。提灯に灯りがともり、お神輿が通りを練り歩く、その様は毎年繰り返される光景ですね。お祭りに関する本を読んで、ぜひその祭りのウンチクを語ってみてはいかがでしょうか？

◆ほかにもこんな資料

- 「とっておきの里祭り」 岡村直樹著 心交社 2008
- 「都道府県別 祭礼行事・埼玉県」 おつひつ 1996
- 「埼玉の民俗 年中行事」 長井五郎著 北辰図書 1993
- 「中学英語で日本の祭りが紹介できる」 山田弘著 エル出版社 2008
- 「あみや双書2 大宮のまつり」 大宮市教育委員会 1999
- 「さいたま市指定文化財の紹介」 さいたま市教育委員会 2005
- 「歴史発掘8 祭りのカネ銅鐸」 佐原真著 講談社 1996
- 「日本の奇祭」 合田一 道著 青弓社 2006
- 「NHK美の壺 神輿」 日本放送出版協会 2008
- 「雛まつり」 福田東久著 近代映画社 2007
- 「鬼がゆく 江戸の華 神田祭」 木下直之 福原敏男著 平凡社 2009
- 「なごさき くんち」 太田大八作 童心社 1980
- 「高山祭」 山本茂実文、宮本能成絵 草土文化 1987
- 「視聴覚資料 DVD&ビデオ 「四季に咲く京都三大祭」 京都新聞社 1997
- DVD 「日本のまつり」 東北編、信越・北陸編、東海編、中国地方編、九州・沖縄編 地域伝統芸能活用センター 2005-09
- CD 「実用盤日本の音 2」 日本コロムビア 1999
- CD 「秩父のまつりと神楽」 埼玉県立民俗文化センター 1991
- CD 「夏祭り」 とも音頭ベスト」 井出真生 日本コロムビア 2001
- CD 「日本全国夏祭り！ 音頭＊盆踊り＊総踊り」 ROMミュージックエンタテインメント 2007



としかん 探偵事務所

なぜ大事なお神輿を担いで練り歩いたり、ゆすったりするの？

4 神輿は神様の乗り物ですが、もととは貴族が乗っていた御輿で、神様が擬人化されるなかで今の神輿ができたと考えられています。

日本の神様は、この神社でも必ずしも静かに常在というわけではありません。祭りのときに来臨し、終わればまたお帰りになる、という存在なのです。しかも降りてきても、神社でじっとされているわけではなく、氏子地域を見回るのが、これを例祭(大例祭)のみゆき(御幸・神幸)といわれています。

また、そのみゆき(巡行)のとき、かならず神が休憩される場所「御旅所」を設けられますが、これは担ぎ手に酒などが振舞われる休憩所となることが同時に、神様はその場所で集中的にその地域の災厄を吸い上げてくださっていると考えられています。

神輿を上下左右に揺るのは、「霊振り」といって、振ることによって、神様の霊力がさらに強まるという考え方によります。神様を納めた神輿を振り回しながら練り歩けば、地域全体が幸せになれるというわけなのです。

参考文献

- 『なるほど！民俗学』 新谷尚紀／著 P.H.P 研究所
- 『日本人が大切にしてきた大人のしきたり』 柴田謙介／著 幻冬舎
- 『日本の風俗起源を知る楽しみ』 樋口清之／著 大和書房
- 『日本の祭り』 菅田正昭／著 実業之日本社